

B・M・エリアーシヨヴァーと大正期・昭和初期の日本（一）

——新研究の出発点およびその展望——

ブルナ・ルカーシユ

はじめに

大正期・昭和初期に四度も来日し、数多くの日本の文化人と交流を持ったチェコの女性旅行家、小説家、翻訳家でもあるバルボラ・マルケータ・エリアーシヨヴァー (Barbora Markéta Elišová, 一八七四(？)～一九五七)⁽¹⁾の活躍およびその功績については、少なくとも筆者が知るかぎり、日本ではこれまでほとんど紹介されていない⁽²⁾。一方、現在のチェコでは、東南アジアのみならず、南アフリカやオーストラリアなどを歴遊した女性旅行家としてその名が知られている。しかし、知られているとはいえ、決して研究が盛んに行われているわけではなく、エリアーシヨヴァーの遍歴を簡略に紹介した幾つかのエッセーや小論文

のほかに、本格的な研究、とくに日本における彼女の活躍に焦点を当てた研究は皆無に等しい。

では、エリアーシヨヴァーとはどのような人物であり、どうして私たちはその活躍に注目すべきなのであろうか。

記すまでもないが、エリアーシヨヴァーは日本を訪れた最初の女性旅行家ではない。一例をひくと、世界一周旅行を敢行し、帰国後に旅行記『サンビーム号』での旅『*Joyage in the Sunbeam* (London: Longmans, Green, and co, 1878)』を刊行し注目を集めたイギリスの女性旅行家アニー・ブラッシー (Annie Brassey, 一八三九～一八八七) は、エリアーシヨヴァーより三五年も早く、一八七六年に日本を訪れている。(のちに詳しく触れるが、刊行後たちまちベストセラーとなり、矢継ぎ早に複数の外国語に翻訳され

たブラッシーの旅行記をエリアーショヴァーが来日前に読み、感化された可能性が高い。)。

エリアーショヴァーは、日本を最初に訪れたチェコの旅行家でもない。ここで紙面を割いて説明することはできないが、近年日本にも紹介されている旅行家ヨゼフ・コジェンスキー (Josef Kojenský, 一八四七～一九三八) は、一八九三年に日本を訪れ、帰国後に『世界一周の旅』*Cesta kolem světa* (Praha: J. Otto, 1896-1902) という旅行記を刊行した⁽³⁾。また、コジェンスキーの甥にあたり、二〇世紀前半のチェコで人気を集めたジャボニズム文学の代表的作家として知られるジョエ・フロウハ (Joe Hloucha, 一八八一～一九五七) もエリアーショヴァーより早く、一九〇六年に来日している⁽⁴⁾。

数多くの旅行家たちがエリアーショヴァーより早く日本を訪れ、帰国後に旅行記その他の著書をもって日本文化を盛んに紹介していることは明らかである。それでは、エリアーショヴァーと他の旅行家たちはどのような点で異なるのだろうか。言い換えれば、旅行家としてのエリアーショヴァーの特色はどこにあるだろうか。

① **滞在期間** まず第一に、滞在期間が挙げられる。他の旅行家たちと異なり、エリアーショヴァーは四度も来日し、その都度比較的長い期間、日本に滞在している。最初に来

日した時はおよそ一年(一九二二～一九二三)、二度目はおよそ一年半(一九二〇～一九二二)、三度目(一九二二)と四度目(一九二九)は数か月日本で過ごしている。合計で三年以上も日本に滞在したエリアーショヴァーは、日本文化や日本人の生活を詳しく知る機会を持ったばかりではなく、様々な友好関係を築くこともできた。

② **日本語能力** アニー・ブラッシーをはじめ、日本を訪れる旅行家たちの多くは、滞在期間が短かったため日本語を覚える時間がなく、始終日本語と英語(若しくはその他の西洋語)のできる案内人に頼るしかなかった。一方、比較的長い期間を日本で過ごしたエリアーショヴァーは、日常会話で不自由がない程度には日本語を習得しており、読み書きもある程度できたと思われる。

③ **経済状況** イギリスの国会議員を夫に持つアニー・ブラッシーは高級ヨットで世界一周旅行を行い、各地で制約を受けることなく自由に行動ができるほどの経済的な余裕があった。一方、孤児として育ち、女学校の英語教師をつとめていたエリアーショヴァーは、初めて日本を訪れる際には、貯金と友人らが集めてくれた饑別を唯一の資金として旅の途に就いた。エリアーショヴァーには決して経済的な余裕があったわけではない。

④ **日本での求職** 来日前のエリアーショヴァーの経済状

況は、来日後の彼女の活動内容に決定的な影響を及ぼしたといえる。アニー・ブラッシーをはじめ、一九世紀後半と二〇世紀の初めに訪日した旅行家たちの多くは、名所旧跡を見学しながら日本文化に親しんだ。すなわち彼らはツーリストとして日本を眺めたわけだが、日本で職に就くことはまずなかった。一方、初めて日本を訪れたエリアーシヨヴァーは、来日して早々収入源を求めざるを得ない状況におかれ、知人の紹介で英語の講師をつとめることになった。また、一九二〇年、二度目に来日した際、エリアーシヨヴァーはチェコスロヴァキア大使館の書記官をつとめていた。

⑤ **日本の文化人との交流** 当然のことだが、このような状況におかれたエリアーシヨヴァーの日本体験と、他の旅行家たちの日本体験とはずいぶん異質なものであった。日本を旅した旅行家たちはたいてい異文化という壁を超えることができず、あくまでも日本を〈外〉から眺めていたが、日本で生活したエリアーシヨヴァーは日本の文化に〈内〉から触れる機会に恵まれたと言えよう。あるいは、エリアーシヨヴァーのことを〈旅行家〉ではなく、寧ろ〈滞在者〉もしくは〈生活者〉と考えたほうが適切かもしれない。そして何よりも、このような独特な状況におかれたエリアーシヨヴァーが、同時代にさまざまな分野で活躍した日本の

文化人と親密な交流を持ったということに注目すべきである。

前述した通り、エリアーシヨヴァーの活躍の内容は現在ほとんど解明されていない。このような現状を遺憾に思う筆者は、今後本誌の紙上で様々な資料を紹介・解説しながらエリアーシヨヴァーの人物像を浮かび上がらせたいと考えている。なお、その際には、概ね次の二点に注目したい。

① **日本における活躍** 大正・昭和初期に四度訪日したエリアーシヨヴァーは、日本の女性教育家（主に日本女子大学の卒業生および教員たち）、音楽家および音楽研究者（山田耕筰、兼常清佐、牛山充、田辺尚雄）、文学者（網野菊）などと交際したが、筆者はエリアーシヨヴァーとその周辺にいた日本の文化人の人脈を探り、エリアーシヨヴァーが彼らにどのような刺激を与えたのか、また逆に、彼らがエリアーシヨヴァーにどのような刺激を与えたのかを明らかにしていく。

② **母国における活躍** エリアーシヨヴァーは、積極的にチェコの新聞雑誌に記事を投稿し、また複数の著書を刊行したが、その中で、伝統文化だけではなく、日本の近代文化も紹介した。一九二〇年代のチェコでは、ジャポニズム小説をはじめ、日本文化の様々な側面を紹介した本が多数刊行されているが、女性の眼差しで日本を見つめたエリ

アーショヴァーの新聞記事や著書はそのなかでも異色を放ち、疑いなく研究に値するものである。

以上、筆者が本研究の出発点および今後の方針についてごく簡単に説明したが、本稿では以下、エリアーショヴァーの略歴を記しておく。

B・M・エリアーショヴァーの略歴

B・M・エリアーショヴァーは、当時オーストリア＝ハンガリー帝国の支配下に置かれていたチェコの東部にあるモラヴィア地方のイジーコヴィツェ村 (Jihkoviče) に、一八七四年一月二日に生まれた⁶⁾。エリアーショヴァーの生立ちについては詳しく知られていないが、後年に懐かしく思い出されるような明るい幼年時代を過ごしていないのは確かである。私生児として生まれ、四歳の時に母を亡くしたエリアーショヴァーは、親戚と村の人たちの援助により育てられた、と後に彼女自身が自叙伝(ナープルステック博物館所蔵、未発表)に書き記している。同自叙伝によると、親のいない孤児という悲しい運命を背負われた彼女にとって、唯一の慰めとなったのは勉学であった。そして、若い頃からエリアーショヴァーが全力を注いだという勉学こそが、やがて彼女に自立への道を開いたのである。

一六歳の時、エリアーショヴァーは、モラヴィア地方第一の都市ブルノに移住し、工場で働きながら夜間学校に通い、語学を極めた。その後、ウィーン滞在を経てプラハに移住したが、ここでも、工場の事務員をつとめながら勉強をつづけた。そして、英語の国家試験(試験日未詳)を受け、合格し、高等女学校で教鞭を執ることとなった。長年の努力の結果、エリアーショヴァーは一定の社会的地位を確保し、経済的に安定した生活を手に入れることに成功した。

ここで注目すべきは、プラハのカレル大学で英語の国家試験を受ける時、エリアーショヴァーが、カレル大学の教授であり、当時英文学者として名を馳せていたヴァーツラフ・モウレック (Václav Mourek, 一八四六―一九一一) を知ったということである。モウレックは思想の上でエリアーショヴァーに強い刺激を与えたばかりでなく、はじめは彼女を経済的にも支援した。そして、このような支援があったからこそエリアーショヴァーは初めての海外旅行(イギリス、フランス)に発つことができた。モウレックは正しくエリアーショヴァーの人生を変えた人物であるといつてよい。興味深いことに、モウレックは、一八八三年、前述のアニー・ブラッシーの旅行記『世界一周 サンビーム号での旅 *Kolem světa řídil po lodi Sunbeamu*] (Praha:



初来日時のエリアーショヴァー（1913年撮影、『楽しき時の日本、悲しき時の日本』所収）

Nákladem Libuše, Matice zábavy a vědění, 1883) として翻訳刊行している。海外旅行を夢見るエリアーシヨヴァーとモウレックとの会話にブラッシーの旅行記の名が挙がったであろうことは容易に想像できる。エリアーシヨヴァーが初めて日本に関心を持ったのは、この本の刺激があつたことだったかもしれない。あるいは彼女はブラッシーの旅行記に勇気づけられ、日本旅行を思い立ったのではないだろうか。筆者の憶測にすぎないが、そう考えても無理はないだろう。

一九一二年、エリアーシヨヴァーは最大の不幸に見舞われた。この年、結婚の準備を進めていたところ、結婚直前に婚約者が突然病没した、と自叙伝に記されている。婚約者の死がエリアーシヨヴァーに強烈な衝撃を与えたであろうことは想像に難くない。だが、彼女はそこで意気消沈し悲しみに打ちひしがれることなく、旅に出ることを決意した。そして、当時英語の教師を勤めていた高等女学校で一年の無給休暇をとり、憧れの日本に向かった。

エリアーシヨヴァーは出発当時、日本に頼るべき知己がひとりもなかったが、モウレックは、東京大学で教鞭をとり英語を教えていたジョン・ローレンツ (John Lawrence, 一八五〇〜一九一六) を知り、彼にエリアーシヨヴァーの世話を頼んだ。日本に到着したエリアーシヨヴァーが数週

間ローレンツ一家で世話になったことを考えると、このような繋がりがなければ、エリアーシヨヴァーの日本旅行はおそらく実現されなかつただろうと思われる。

一九一二年七月に、エリアーシヨヴァーは初めて来日した。プラハからモスクワまで、モスクワからヴラジヴォストクまでは汽車を使い、ヴラジヴォストクからは船で日本に渡つた。日本に到着したのは夏であり、最初の数週間はローレンツ一家の軽井沢別荘で過ごしている。しかし、エリアーシヨヴァーには観光客として日本国内を自由に旅行できるほどの資金がなく、軽井沢から東京に戻つてから、早速仕事を求めざるを得なかつた。最初はローレンツの紹介により家庭教師として語学を教えていたが、その後、通信官吏練習所で英語教師として働くことになつた。最初の日本滞在は一年程に及び、一九一三年七月にエリアーシヨヴァーは帰途に就き、ハワイとアメリカを経由してチェコへ帰国した。帰国後は日本での生活を描いた記事を多数発表し、さらに一九一五年に旅行記『日本人との生活一年』*Rok žitva mezi Japonci* (B.M. Eliášová, 1915) を刊行し注目を浴びた。

一年ほど日本に滞在し、日本の文化や芸術、日本人の生活の紹介に努めたエリアーシヨヴァーは、日本について高い見識を持つ〈専門家〉として認識されるようになったと

いえよう。一九二〇年、新興国チェコスロヴァキアが日本で公使館を開く時、エリアーシヨヴァーが公使館のスタッフに起用されたのはそのためであろう。後年に刊行された回想録『カレル・ペルグレルのモットー』*Pod Karltem Perglerem* (B.M. Eliášová, 1929) からは、エリアーシヨヴァーが公使館の書記官に任命された当初、日本での仕事に対して少なからぬ期待を持っていたことを読み取ることができる。だが、日本に到着してからは、ペルグレル公使と折り合いが悪く、仕事に対して段々不満と苛立ちが募った。エリアーシヨヴァーは公使館での人間関係と仕事について深く思い悩んでいたが、公使館の外では、活発に日本の文化人と交流し、また、日本では当時ほとんど知られていなかったチェコの文化を紹介した。⁷⁾一九二一年にベルグレル公使が解任され、その数か月後、エリアーシヨヴァーもブラハに呼び戻された。帰国したエリアーシヨヴァーは高等女学校に復帰することなく、創作活動に専念した。

一九二三年、エリアーシヨヴァーは、日本文化の理解を深めることを目的に再び来日したが、同年九月に横浜で関東大震災を経験した。危うく命拾いしたものの、全てを失った彼女は日本を離れることを決意し、アメリカ経由でチェコスロヴァキアに帰国した。⁸⁾

帰国したエリアーシヨヴァーは再び各地で講演を行い、

新聞や雑誌に記事を投稿し、更に旅行記『楽しき時の日本、悲しき時の日本』*V Japonsku v dobých dobých i zých* (B.M. Eliášová, 1925) と評論集『日本の娘たち』*Deery Nipponu* (B. Koci, 1925) などの著書を出版した。二つのうち前者は、在日朝鮮人の虐殺を含めて関東大震災後の混乱を外国人の観点から捉えた点で貴重な資料となる。後者の評論集は、芸者の世界に強く惹かれた男性作家によるジャポニズム文学とは異なり、近代の日本女性の生活、教養、社会進出などに着目した点で注目に値する珍しいものである。

エリアーシヨヴァーが最後に日本を訪れたのは一九二九年のことである。この際、チェコスロヴァキア外務省より補助金を得て日本に渡ったエリアーシヨヴァーは、日本だけでなく、朝鮮半島と満州を漫遊し、帰りはソ連を見学して帰国した。(帰国後は旅行記を出版していないため、この最後の日本滞在についてはナールステック博物館に所蔵されている未発表の日記と書簡の他に資料はない。)

その後のエリアーシヨヴァーの活躍、ことに戦時中および戦後の生活についてはほとんど知られていない。ナールステック博物館に所蔵されている資料から読み取れることは少ないが、残されている書簡からは、エリアーシヨヴァーが、リューマチを患いながら孤独な晩年を送ったことがわかる。バルボラ・マルケータ・エリアーシヨヴァー

は一九五七年四月二七日にプラハの自宅で息をひきとり、
プラハのオルシヤニ墓地に埋葬された。⁽⁹⁾

【注】

- (1) エリアーショヴァーの生誕に関しては二つの資料がある。
エリアーショヴァーが生まれたイジーコヴィツェ村の教会の生没記録簿によると、彼女は一八七四年一月二日に生まれたと記されている。しかし、現存している複数の旅券その他の証明書には一八八五年一月二日生まれと記されている。
- (2) 口頭発表としては、ブルナ・ゲハルトヴァー・マルケータ「[Japonky Barbory Markety Eliášové (エリアーショヴァーと日本の女性たち)」（第一回日本チエコ文化学会議、在日チエコ共和国大使館ホール、二〇一六年六月一二日）などがあるが、活字になった論文は見当たらない。
- (3) ヨセフ・コジェンスキー著・鈴木文彦訳『明治のジャボンスコーボヘミア教育総監の日本観察記』（サイマル出版会、一九八五年1月）を参照。
- (4) 興味深いことに、フロウハの最初のジャボニズム小説『暴風に舞う桜』*Sakura ve víchřici* (Praha: Jos. R. Vilímek, 1906) は日本を舞台として、西洋人の男性と日本人の女性の悲劇的な恋愛関係を描いたセンチメンタルな小説で

あるが、本書は、フロウハが日本を訪れる前に出版された。すなわち、フロウハは、ピエール・ロテイ (Pierre Loti, 一八五〇―一九二三) の名作『お菊さん』*Madame Chrysanthème* (チエコ語訳は一九〇五年に刊行される) や叔父のコジェンスキーの著書などを参考にしながらこの小説を書き上げた。当時のチエコでは、作家の実体験をもとにして書かれた作品と思われ、高く評価された。フロウハが本書の原稿料を使って初来日を果たしていることも興味深い。

- (5) エリアーショヴァー旧蔵の資料のほとんどは現在、整理されないまま、プラハのナーブルステック博物館 (Náprstkovo muzeum) に保管されており、その他、一部の資料は、プラハの国立文学記念館 (Památník národního písemnictví) と、エリアーショヴァーの生地イジーコヴィツェにほど近いシュラパニツェ郷土資料館 (Muzeum ve Šlapanicích) に保管されている。
- (6) エリアーショヴァーの幼年時代については、自筆の履歴書と未発表の自叙伝が残されているが、前者は極めて簡略であり、後者は、いってみれば文学的自叙伝として書かれたため、事実と異なる内容が多い。エリアーショヴァーの生い立ちについて窺い知ることができる資料は現在、これらのほかに確認されていない。

(7) 例えば、一九二二年八月二日、一三日に『読売新聞』に発表された「チエツクの婦人」で、エリアーシヨヴァーはチエコスロヴァキアにおける婦人問題について紹介している。エリアーシヨヴァーは日本女子大学校桜楓会の『家庭週報』にも記事を投稿した。例えば、「チエツク国のソコルス」(『家庭週報』一九二〇年一月二二日)は筆者名が記されていないが、エリアーシヨヴァーの記事である。

(8) アメリカを経由してチエコスロヴァキアに帰ろうとしたが、アメリカでは、不運が重なり、電車の衝突、脱線事故に遭った。

(9) 戦時中、エリアーシヨヴァーは日本の行く末に対する率直な懸念を表した詩「日本よ、何処へ行く」*Quo vadis, Japansko?* (未発表) を執筆している。また、同じく戦時中に西洋人の男性と日本人の女性の恋愛関係を描いた口マンス『ハナコ 日本の近代女性の物語』*Hanako-Román moderní japonské dívky* (Praha: Rebovovo nakladatelství, 1944) を刊行している。

(ブルナ ルカーシユ・実践女子大学助教)